



渡船場周辺

笠松 一夫

水の季節——。こぶなと(小舟渡)といえ、年配の方には中学時代、チンチン電車にすし詰めされて、学校水泳に通つた思い出がなつかしまれよう。白山連峯を見はるかし、九頭竜の清流たぎつところ、展望うるわしいこの山峡は、模式的な河川中流景観と地理大系は図録し、電鉄会社は早々遊園地化を試みて、沿線一の勝地に仕上げた。しかし小舟渡はその単直な命名の如く、白山・平泉寺への往還舟渡しとして親しまれ、長い歴史を街道とともに河川とともに生きてきた。

小舟渡の名は操舟に従事した船頭部落の字名で、渡舟場をも指す。吉田と大野の郡

笠松 わが町わが村—渡船場周辺

境、関門の要所でもある。「小船渡船渡—馬船—川幅四十三間水七尺岸四間(越前国絵図)」の川幅や水流、水勢には時代の変化がない選ばれた場所といえよう。渡船時代は幕府領森川村地籍で、村役人がその管理に当つた。

渡船場の起原は「舟渡始りの儀は相知不申(宝暦十年村差出明細帖)」で年代は不明である。同じ九頭竜川の舟場で、この川上のウウの島渡しはハコ渡しともいい、白山禪定道を開いた泰澄大師が箱舟に乗つて渡つた伝説があり、小舟渡にも伝える。渡しと泰澄伝説は北陸道日野川越えの白鬼女渡しが代表的、白山道の開かれた古い時代も考えられよう。

船人たちが他から移つてきて特殊な身分に扱われたことは、白鬼女渡しの船頭者と同様で、言語のなまりや風習には土地百姓とは異なつたものがあり、小舟渡の字名も船頭部落の卑称とされてきつた。当村地内小舟渡守共家数二十三軒、人数八十一人、馬十疋(前記明細帖)で、与えられた船屋敷に住み、船頭二十二人衆二人の頭衆があり、小作や雇い仕事にもついて暮しを補つた。公儀からは毎年四石二

斗七升六合の給米を受けたが、これは村年貢のうちから差し引かれた。

船は普通予備船を合わせて、大船三そう小船二そうが用意された。大船は幅四尺五寸長さ六間八ケ年用、小船は幅三尺五寸長さ三間半五ケ年使用を限度としたが、二三年で大中の破損ができ、「小舟渡大小共船流失船人二人流死(天保十年勝山町年寄控)」と、出水による流失も多く、毎年新造や修理を行つた。新造や修理の入費は、これを船組と称する近郷の村々に割りあて、特に新造の場合は船組総代による船寄合を開き「小舟渡新艘註文仕様書(安永二年)」にて、発注するか、請負入札の上、組分担を定め「小舟渡大船は町郷中立合割小船は一度限として惣割に金五匁計画遣事(安政三年年寄控)」と、組内はまた、それぞれに割り合つた。新船が出来上ると船組総代で見分「船見分の時は町年寄は払先羽織踏込着帯刀にて出役かご人足は庄屋より指出候事(安政三年)」町役人は威勢を張つた。

渡船が船橋に代つたのは明治十六年、明治六年の船賃は一人五文、馬一疋口付人共十五文、荷持人八文で、一日平均人二十五

人、馬九疋、荷持二十四人の往来で、年平均収入百六十四貫八百八十文の予算を見立てた。小笠原勝山藩主の参勤交替江戸への道中にも当り、安永六年帰城道中総勢百二十四人の行列船越しは、近郷比島村船頭の助力も頼み、一貫五百文が支払われた。

× この渡しを越えて嫁いできた私の祖母はその時十七才、まだ手まりをつき、ほゞずきを含む日が多かった。初産を里ですまして養生中、婚家の母の死を聞き帰参を急いで舟場に着いたが、産の忌が明けぬとあつて、用意の大だらいに乗つて母子とも渡された。川止め時のとばく開帖、船中のすり捕り物、馬船の馬を河童がねらつた話など、船場に投影するさまざまな人間模様、渡船は人生の哀歡を乗せて運んだ。河水は記録を流し物語りをよどませ、史学に冷たく文学に暖かい。ひとり河岸の岩壁は風霜に動ぜず、静かに河川譜をつづる。